

学術調査報告書

2008年 3月 16日

(フリガナ) 申請者名	ナカジマ クス 中島 久朱	入学年度 学年	2007年度 1年
----------------	------------------	------------	--------------

研究題目	イギリスにおけるエスニック・マイノリティ教育政策研究 —民族コミュニティと学校、地方当局の関係性に関する調査—
主任指導教員	岡田 昭人

(1) 学術調査の目的

過去数十年間の急速なグローバル化に伴い、現在世界中の様々な国や地域で社会における価値の多様化、多文化化が進行している。多文化の共存により社会的価値の多様化が促進する状況下においては、公教育思想に内在する原理の変化も避けられるものではない。

報告者は、博士論文において、「多文化教育」を、多様化する社会の統合を視野に入れた公教育システム全体を包括する理念であると捉える。その上で、行政による教育政策を考察の対象として、公教育の統括主体が多文化社会の問題をどのように捉え、どのように関わってきたか、そして、社会的統合という意味における公教育体制そのものに生じた構造の変化がどのような要因によって引き起こされたものであるかを考察する予定である。

本研究の目的は多民族・多言語・多文化社会における社会統合機能としての公教育のあり方が如何なるものとして捉えられ定義されてきたか、あるいはされているかを明らかにすることにおく。公教育は当該国の政治的社会的統合と社会集団の維持・発展に関わる社会的機能であるが、社会体制統合原理・機能の側面と多文化的状況の下における公教育固有の課題群との間には幾つかの対立が生じており、しかも、その両者間の和解を可能にする新たな公教育の原理はまだ確立されていない。そこで、多民族・多文化国家であると自認するイギリスにおける多文化教育の事例の研究を通して、上記問題に対する検討を試みる。

イギリスは古くから移民や亡命者を受け入れてきた歴史があるが、特に戦後 1940 年代後半からの旧植民地等よりの移民の流入とその受け入れに関しては、多くの議論がなされて

きた。その流れは同化、排斥、統合という道を辿ってきており、その傾向は移民の子どもたちへの教育にも反映している。その結果現在の同国では、多民族・多文化国家としての自己像が一般に受け入れられており、エスニック・マイノリティの子どもに対する教育政策も、中央政府の主導により多様な展開が見られる。そのことは2006年9月および2007年9月にロンドンにおいて行った教育関係者への聞き取り調査等においても実感として感じ取ることができた。しかし、一方で画一的な評価体制や、教育現場への市場主義原理導入に伴って激化した競争等により社会的格差の拡大・固定化が促進されている現状への批判もある。

そこで、今回の調査では、これまでの調査に引き続き、総人口の約1割が移民や難民、その子孫等で構成されているイギリスにおいても、更に全国のエスニック・マイノリティの約半数が居住しているロンドンでの現地調査により、同国における多文化教育の最新の動向と問題点を明らかにすることを目的とした。前回までの調査では、マルチ・エスニック的状况における教育の現状把握のため、あえて特定の民族や集団に焦点を絞ることなく調査・分析を行った。しかし、同国のエスニック・マイノリティの教育における問題点として、民族グループ間の教育達成度の顕著な差が指摘されており、それは博士論文の執筆に当たっても看過することのできないものであると判断した。

一方、同国では、特に2001年の夏に北部の街オールダムが発端となり近隣のブラッドフォード等で人種間関係における摩擦を背景とした大規模な暴動が起こってから後、多様な民族的・文化的・言語的背景をもつ人々を抱える多文化社会として、多様性と統一のバランスを如何に図るかということが緊要な課題とされてきた。そのような背景を受け、2002年以降政府が取り組んでいるのが「コミュニティのコミュニティ」(Community of Communities)という概念に基づく「コミュニティの結束」(Community Cohesion)政策である。そこでは、目的を共有し、多様な価値を容認することの利益を理解し、機会の均等を実現することが目指される。1980年代以降の同国における多文化主義政策は、結果的には民族グループ毎の断絶と集団間の格差を固定化してしまったと結論づけ、今後の社会的発展のためには多様な文化の共存・共栄を目指すことが緊要な課題として位置づけられた。[DfCLG 2006,153]

そして、以上のような社会的結束を実現するための装置として公教育に大きな役割が見出されており、多文化教育の文脈においても、初期多文化主義、反人種主義、インクルー

ジョンを経て、「コミュニティの結束」という段階を迎えているとされている。[Vincent and Coles 2003: 6]

したがって、本調査では、現在のイギリスにおける社会統合の問題につき、現在同国政府が推進する「コミュニティの結束」政策と教育の関係、および民族コミュニティに注目し、主に、同政策に関する文献・資料の収集・分析と聞き取りによる調査を行った。

(2) 調査実施地および期間

本調査は、2008年2月10日より2月29日の間、イギリス、ロンドンにおいて行ったものである。

文献・資料については、主にロンドン大学東洋アフリカ研究所図書館、同大学教育学大学院図書館、ならびに大英図書館にて収集した。

聞き取り調査については、ロンドン北部の行政区であるハリンゲイ区の地方当局（Local Authority）の教員研修センター（Professional Development Centre）ならびに、同地区内のノエル・パーク小学校（Noel Park Primary School）において実施した。

ハリンゲイ地区について

インナー・ロンドンの北部に位置する行政区の一つであるハリンゲイ地区においては、2005年現在の人口224,500人のうち、20パーセントをカリブ海系およびアフリカ系黒人が占め、続いて南アジア系住民が6.7パーセント、1.1パーセントを中国系住民が占めている。中でも、本調査による聞き取りを行った小学校が位置する地域は、同国に移り住んできた年数が比較的浅い移民や難民(refugee)、政治亡命希望者(asylum seeker)が多く居住し、また社会・経済的に同国で最も剥奪された(deprived)地域の一つに数えられる場所である。地域住民の民族的背景は多岐に渡り、約30の民族コミュニティが存在し、それらのうちいくつかのコミュニティにおいては、継承語の維持や英語の習得、子どもたちの学習支援のため、週末に補習授業を行う等、独自の教育活動も行われている。

ノエル・パーク小学校について

同小学校は、在籍する児童の約 80 パーセントがエスニック・マイノリティとしての背景をもち、民族的・言語的・宗教的にまさに多文化的状況にあるといえる。エスニック・グループ別在籍児童数では、2007 年 8 月現在、全 508 名中クルド系児童が 51 名で最大で、以下その他白人（イギリス系以外の白人のうち、近年 EU に加入した東欧諸国からの移住者が主）45 名、カリブ海系黒人 42 名、ソマリア系黒人 41 名、トルコ系 28 名、イギリス系白人（White - British）23 名、バングラデシュ系 20 名と続く。その他、世界中のあらゆる国や地域にルーツをもつ子どもが在籍しており、学内では常に 40 種前後の言語が子どもたちの（場合によっては教職員の）母語として使用されている。また、同校では、地域の芸術家や公共団体との協力のもと、子どもと保護者を対象としたワーク・ショップや保護者のための第二言語としての英語指導等も行われており、保護者も頻りに学校を訪れる環境にある。

(3) 学術調査の具体的な実施内容

イギリスにおけるエスニック・マイノリティ・グループ（コミュニティ）と教育問題、「コミュニティの結束」政策に関連する文献・資料の収集、ロンドン・ハリンゲイ地区の教育関係者、保護者に対する聞き取り調査、小学校で開催されるワーク・ショップへの参与観察等を実施した。

文献・資料に関しては主に以下の分野に関連する文献を中心に収集した。

1. 多文化主義に関連する文献
2. 人種問題、民族グループ（コミュニティ）に関連する文献
3. 「コミュニティの結束」政策（社会的結束含む）に関連する文献
4. 上記 3 項目につき、教育学的視点から分析している文献
5. フィールドとなる小学校に関する資料
6. 当該地域のエスニック・マイノリティの子どもの教育に関連する資料
7. 関係者へのインタビュー（IC レコーダーにて録音、文字化）

以上、1 から 4 に該当する文献については、ロンドン大学東洋アフリカ研究科附属図書館、

ロンドン大学教育学大学院付属図書館、大英図書館および現地の専門書店等にて購入した書籍を含む。また、5、6に関しては、調査訪問時に関係者より入手、7に関しては、ロンドン・ハリンゲイ LA の教員研修センターの評価ターゲット児童担当チームマネージャー (School Improvement Officer Assessment Targeted Pupils Team Manager) および、同 LA の幼児教育における保護者とのパートナー事業コーディネーター (Parents as Partners in Early Project Coordinator)、ノエル・パーク小学校の校長 (Head Teacher)、校長補佐 (Assistant Head)、学習指導者 (Learning Mentor : トルコ語話者)、生活指導および特別プロジェクト担当上級教員 (Behaviour and Special Project Senior Teacher)、保護者 (4名 : 民族内訳 ; イギリス系白人 2名、クルド系 (トルコ出身) 1名、バングラデシュ系 (イギリス出身) 1名) を対象に実施した。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

本調査では、まず「コミュニティの結束」政策に関して、関係政府機関発行の資料、及び過去数年の間に発表された研究論文等を収集し、それらをもとに分析を試みた。その後、地方当局のエスニック・マイノリティ教育担当者や教員等の実際の教育関係者、および調査を実施した小学校に所属する児童の保護者を対象とした聞き取りにより、主に、①エスニック・マイノリティ児童の民族的・文化的背景の教育への影響、②地域の民族コミュニティと教育機関との関係性、③「コミュニティの結束」政策に対する実際の教育関係者および民族コミュニティの一員としての保護者の認識、④同政策が地域の教育に及ぼしている影響に関して調査・分析を行った。

1. 「コミュニティの結束」政策と教育

2002年教育法第72条 (Education Act 2002, Section72) は、全ての公立学校に対し、学校および社会における子どもたちの精神的、道徳的、文化的、心理的な発達を促進し、子どもたちの将来における機会、責任、経験に寄与する教育を提供することを義務として明文化した。そのために、学校は人種的な差別を廃絶し、機会の均等を促し、異なるグル

ープ間における良好な関係性を築く責任があるとされた。更に、2007年の9月からは、全ての公立学校において「コミュニティの結束」を促進させるための教育を行うことが義務づけられ、2008年度からはOfSTEDによる監査項目にも含まれこととされた。[DCSF2007:2]

子ども、学校、家庭省 (Department for Children, Schools and Families: DCSF) の定義によれば、「コミュニティの結束」とは、全てのコミュニティに共通するヴィジョンと価値観が社会的多様性と同時に保たれ、全ての成員に一定の機会が保障される社会の実現のための取り組みであるとされる。そして、隣人との関係から国家レベルまで、様々な段階における社会の未来のために、異なる人々、異なるコミュニティの間に広く価値を共有することが肝要であるとされる。[ibid.:3]更に、共有されるべき価値観 (sense of belonging) として以下の二つが上げられる。

- 特定の場所に居住する際の個人の権利と責任に対する強い理解が涵養されること
- 異なる利害を持つ者同士が公正に裁かれる社会制度への信頼と社会を監視する主体としての役割が正当化されること

つまり責任ある個人として社会に関与することが求められているのである。そして、継続的なコミュニティの結束の実現のための学校の役割として、全ての子どもの教育達成と全ての若者の能力の開発のための機会を作ることであると位置づけている。[ibid.:4]そして、学校が関与するコミュニティを4つの段階に区分する。まず、学校自身のコミュニティとしての機能があげられる。生徒や保護者、学校職員および地域行政、そして学校の施設を利用する全ての人々を含むものである。次に、学校が所在する地域のコミュニティがある。更に、イギリスという国家的枠組みがあげられる。全ての学校がこのコミュニティの一部であると定義づけられる。そして、最後に国家的枠組みを超えたグローバルなコミュニティ、つまり、EU 諸国を含む国際的な関係性の中での学校としての位置付けが示される。[ibid.:5]そして、それらのコミュニティの中で、相互に交流を図り、協調関係を結ぶことが求められているのである。

そして、コミュニティの結束のために学校が果たすべき役割はつぎのように定義される。まず、学校は機会の均等と異なるグループの統合の実現によりコミュニティの結束に寄与することとされる。しかし、一方で不平等と多様性の尊重という問題に目を向けた場合、同時に、価値を共有し、子どもたちが相互に理解しあい、互いに共通する部分を有しているという自信をもたせることも重要な役割であるとされる。[ibid.:6] 換言すれば、差異

をクローズアップし、その差異に基づく差別をなくすことに先立ち、互いの共通点を理解し、一定の価値を共有することにより成り立つ多様性の容認が、現在イギリスにおいて、政府が描く理想像としての、結束した社会のあり方であるといえよう。

2. 地方当局職員への聞き取り調査結果

同地域においても、エスニック・マイノリティ・グループ毎の教育達成格差は重要な課題としてあげられた。特に、カリブ海系黒人、ソマリアを中心としたアフリカ系黒人、トルコ系およびクルド系の子どもがターゲット・グループとして設定されており、毎年学校毎に各グループの平均達成目標が定められ、モニタリングされている。同地区におけるエスニック・マイノリティ教育のための資金としては、中央政府からエスニック・マイノリティ教育達成補助金（Ethnic Minority Achievement Grant：通称 EMAG）ならびに、アフリカ系およびカリブ系児童のための教育達成プロジェクト（African-Caribbean Achievement Project）による補助金を支給され、その 90 パーセントをそれぞれの民族グループ内訳により各学校に配分、その他 10 パーセントで地方当局の運営や各種教育プログラムの提供を行っている。

同地域のエスニック・マイノリティの子ども達が抱える問題として、最も大きな事項のひとつとしてあげられたのが、同地域における移民の移動率（mobility）の高さである。同地域は、渡英後間もない移民や難民が比較的多く居住しており、そのような家庭は、同国での暮らしにある程度慣れた段階で他の地域に移動することも多く、異動率の高さは常に問題とされている。同地域内のエスニック・マイノリティの子どもが多く在籍する学校においては、移民後間もなく、言語的・社会的な問題に加え、同国の教育システムそのものに適応できておらず、そのため多くの教育的課題を抱える子どもが常に在籍しており、そのため、必然的にナショナル・テストの平均点も全国的標準と照らし合わせ低くなりがち傾向にあるという課題を抱えていることが指摘された。

次にあげられたのが、言語的な問題である。英語を母語としないばかりでなく、家庭での読書習慣のない子どもは、学習達成度も低い傾向にあることから、子どもだけでなく保護者も対象として、読書の習慣をつけるための教育プログラム等が実施されている。自国での生活習慣や文化的背景により、母語でも読書をする習慣をもたない保護者には、物語

を語る、作る等のワーク・ショップを行うことによるリテラシー教育プログラムの他、美術館や図書館でのワーク・ショップを実施することにより、休日に家族で美術館や図書館等の文化施設に出かけることを奨励するためのプログラム等も企画されている。また、家庭の教育への参加を促進するための、父親を対象とした文化プログラム等も企画されており、これらの事業では、リテラシーを養うのみでなく、参加者の間の交流を深めることも意図され、地域的な宥和を図る等の成果も得られているということであった。

また、「コミュニティの結束」については、同政策が掲げる課題や目標は、ローカルなレベルにおいては特に目新しいことではなく、その内容についても、同地域では長年取り組まれてきたことであるという指摘がなされた。その上で、なぜ現在政府がこのような政策を強調しているのか、その背景には如何なる意図があるのか、という点が興味深い。同時に、地方行政レベルでは、同政策に対し批判や否定は全くないが、その成果がどれだけあるかという点に関しては、現時点では疑問が残るということが述べられた。

3. 小学校教職員への聞き取り調査結果

まず、同校においてもやはり、当該地域の社会・経済的剥奪が子どもたちの学業達成にとって大きな壁となっていることが強調された。過去には校長職も務め、現在は校長の補佐的業務を行っている上級教員への聞き取りでは、エスニック・グループ毎に教育達成度の差はあるかという問いに対し、それは非常に典型的な設問であるが、民族的、文化的背景に由来する能力差というのはないという見解が述べられた。ただし、上記のような、社会的・経済的に剥奪された状況にある家庭においては、生活を送る上で教育というのは最重要の問題となりにくく、従って、そのような要因から同地域のエスニック・マイノリティ・グループの子どもの学習達成が難しくなる傾向はあるということにも言及された。特に、当該地域には移民や難民、亡命希望者等に安価で提供されていた公営住宅が多くあったために、それに該当する民族コミュニティが多数存在しているが、この数年の間に政府が同地域の公営住宅の多くを一般に払い下げを決定・実行したために、地域内におけるエスニック・マイノリティの人々の住居の確保はより深刻な問題となっており、そのような状況が子どもの学習にも大きく影響を与えているということであった。

また、大部分の親は学校や子どもの学業達成に期待を寄せており、民族的・文化的背景

の違いに由来するグループ毎の学習能力の差は決して認められるものではないが、しかし、イギリスでの生活習慣、教育制度、社会状況への適応の段階で、母国や母文化の影響を受け、困難を抱えているということが指摘された。特に、難民や政治亡命希望者等のコミュニティの場合、一時期にグループとしてまとまって流入してくる傾向が強く、そのような場合には、適応による困難さ等から、ナショナル・テストの実施に際し、ある特定のグループの学習達成度が際立って低くなるのは避けられない問題である。さらに、同校でも子どもの転出入の頻度の高さは、既に述べたような理由により、同様に問題となっている。

なお、グループ毎の過度の性格づけはステレオタイプ化につながり問題であるとの前提の上で、同校にも常に10名弱在籍する、ロマ（いわゆるジプシー）やアイルランド系トラベラーの家庭では、伝統的に教育への期待は低く、最低限度の読み書きと計算能力のみで充分とされる傾向が非常に高いということへの言及もあった。その理由としては、それらの背景をもつ子どもたちは卒業後コミュニティ内部で単純労働に従事することが多く、たとえ、高等教育を受けても（もしくは受けると余計に）、イギリス社会に存在する偏見等により、専門職に就くことは非常に難しい状況にあるということがあげられた。

「コミュニティの結束」政策に関しては、校長をのぞき認識しているものはいなかった。この点については、すでに述べたように学校での取り組みが義務づけられ、学校査察の際の調査項目に含まれることが決定していることを鑑みれば、非常に興味深い状況であると思われるが、そのことにつき同校長の見解を求めたところ、「政府は政策を作りはするが、大抵の場合それを現場に周知するための努力はされず、（にもかかわらず）翌年から監査は行う」ということが通常のこととして行われているということであった。ただし、同校においては、その政策が目指していると思われること、学校内でのコミュニティを超えた結束、あるいは学校自体が多くのグループを包含する一つのコミュニティとして機能するという感覚に関しては理解でき、また既実現されている、というのが各教員に共通する回答であった。その理由としては、同校が積極的に地域の民族コミュニティや保護者に対して行う様々なワーク・ショップや支援等により、学校と各コミュニティの間に良い関係が築けていること、バイリンガルの教職員の存在等により、子どもだけでなく保護者も学校を心の拠り所としていること、同校が築いてきた人種や民族、宗教的背景による差異による差別を排除する環境が子どもたちだけではなく、保護者にとっても安心できる場所として学校が認識されていること等があげられた。

4. 保護者への聞き取り調査結果

学校での生活態度や学習に取り組む際の姿勢等に特別な期待や希望を子どもに寄せているかという点については、民族的・文化的背景による差異は認められなかった。ただし、ムスリムとして、他者への礼節を重んじるという回答はあった。同様にムスリム・コミュニティの一員として、イギリス社会における偏見や排斥の風潮に対し、「我々は危険ではない」、「我々は基本的に友好的である」というメッセージを常に発信している、という回答もあったが、それは、現在のイギリス社会における民族間格差の問題、宗教格差の存在を逆に強く感じさせるものであった。

また、「コミュニティの結束」政策を知っていたものは1名で、エスニック・マイノリティの一員として政府の社会統合政策には興味をもっているが、その効果については大きな成果は認められず、評価もできないということであった。該当者は、政府が新しい取り組みを行う度に、家庭内でもそれらの政策につき話し合うが、同政策に関して、政府はコミュニティのレベルでどのようなことが起き、実際に彼らがどのように感じているのかということを理解しているとは思えないという見解が述べられた。

今回の調査においては、十分な数のサンプルを得られたとは言い難く、この結果のみをもって結論を導き出すことは難しいが、以上の結果は今後の調査の参考となるものと思われる。

まとめ

以上、実際の教育の現場や、人々の生活において、「コミュニティの結束」政策がどのように遂行され、エスニック・マイノリティ児童の教育に如何なる影響を与えているのかということに焦点を当て、民族コミュニティと学校、地方当局の関係性における調査を進めた。その結果、現時点における同政策の影響は不確定のものであり、社会的にその成果を認識できるものではなかった。グループ単位での文化の存在を前提とし、多様な文化的差異を維持しつつ、社会的分離やグループ間摩擦を最小に抑えるというのがイギリスの多文化主義の基本的姿勢であったが、同政策において多様性を認めるといった場合に、どの程度の多様性が認められるのか、(あるいは認められないのか)という点を今後更に議論すべきであると思われる。また、同政策における、社会に普遍的な価値の共有により、結束し

た社会を目指すという理念は批判するものではないが、価値の「普遍化」が行き過ぎれば同化主義的要素が強くなりうるという危険性もあるということも注意深く見る必要がある。

そして、実際の社会においてその成果や存在を認識できないその理由は如何なるものであるか、「コミュニティ」を単位とする場合の「コミュニティ」とは何であるかという曖昧さも含め、例えば民族コミュニティを事例とした場合、政府の認識と実情の間の「ズレ」が存在するのではないかというのが今回の聞き取りの結果に見る印象である。以上のような点につき、今後更に分析を深めたい。

なお、今後の課題としては、以下の点につき検討を要するものと思われる。

まず、博士研究全体にかかる問題として、社会における公教育というマクロな研究対象を分析する研究手法として、特定の地域におけるコミュニティや学校というミクロなレベルにおいて行われる調査が妥当なものとなり得るのかという点である。これについては、現時点で考えうる解決策として、分析の対象を例えば「ロンドンにおけるエスニック・マイノリティと教育」というようにし、範囲を狭めること等を検討している。同じく、方法論の問題で、民族グループ間の教育格差を取り上げるということは、教育社会学的な要因分子研究の方向性をとるのかという指摘を受けたが、分析手法に関しても今後の検討課題としたい。

また、2008年9月より半年間、本学の International Training Program による派遣により、再度イギリスに滞在して、同地区での調査を行うことを予定しているが、今後また聞き取り調査を継続する場合、聞き取り対象がどのレベルに向かうのかも分析に影響するものと考えられ、この点についても検討が必要であろう。

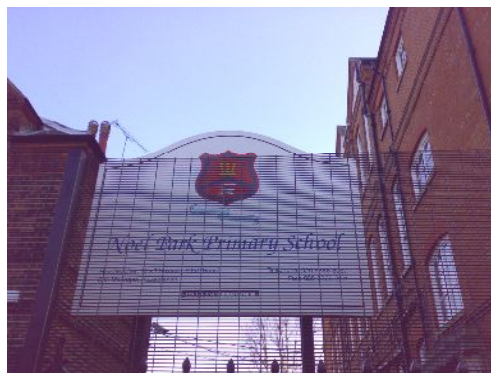
参考文献

Department for Communities and Local Government 2006. Strong and prosperous communities The Local Government. The Stationery Office.

Department for Children, Schools and Families 2007. Guidance on the duty to promote community cohesion. DCSF.

Vincent, R. and Coles, M. 2003. Creative approaches to community cohesion. In Race Equality Teaching. Trentham Books.

(5) 調査地・文書館建物などの写真データ



左上：ノエル・パーク小学校（校庭側面）

右上：ノエル・パーク小学校正門

下：ハリンゲイ LA 教員研修センター

学術調査報告書
(付録：収集文献)

- Abbas, T. 2002. The Home and the School in the Educational Achievements of South Asians, In *Race Ethnicity and Education*. 5(3): 291-316. Carfax Publishing.
- 2007. Muslim Minorities in Britain: Integration, Multiculturalism and Radicalism in the Post-7/7 Period, In *Journal of Intercultural Studies*. 28(3): 287-300.
- Alexander, C. Edwards, R. and Temple, B. 2007. Contesting Cultural Communities: Language, Ethnicity and Citizenship in Britain, In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 33(5): 783-800.
- Appiah, K.A. 2000. Racial Identity and Racial Identification, In *Theories of Race and Racism*. ed. Back, L. and Solomos, J., 606-615. Routledge.
- Archer, L. and Francis, B. 2005. Constructions of Racism by British Chinese pupils and parents, In *Race Ethnicity and Education*. 8(4): 387-407. Routledge.
- Barnes, P. 2006. The Misrepresentation of Religion in Modern British (Religious) Education, In *British Journal of Educational Studies*. 54(4): 395-411. Blackwell Publishing.
- Barton, D. and Tusting, K. ed. 2005. *Beyond Communities of Practice: Language, Power, and Social Context*. Cambridge.
- Bash, L. 2005. Identity, boundary and schooling: perspectives on the experiences and perceptions of refugee children, In *Intercultural Education*. 16(4): 351-366. Routledge.
- Bloch, A. 2008. Zimbabweans in Britain, In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 34(2): 287-305.
- Bhatti, G. 2006. Ogbe and the debate on educational achievement: an exploration of the links between education, migration, identity and belonging, In *Intercultural Education*. 17(2): 133-146. Routledge.
- Brah, A. 2000. Difference, Diversity, Differentiation: Processes of Racialisation and Gender, In *Theories of Race and Racism*. ed. Back, L. and Solomos, J., 431-446.
- Burnett, J. 2004. Community, cohesion and the state, In *Race and Class*. 45(3): 1-18. Institute

of Race Relations.

Croll, P. 2004. Families, Social Capital and Educational Outcomes, In *British Journal of Educational Studies*. 52(4): 390-416. Blackwell Publishing.

Damie, F. and McLean, C. 2007. Raising the achievement of African heritage pupils: a case study of good practice in British schools, In *Educational Studies*. 33(4): 415-434. Routledge.

Davies, I., Evans, M. and Reid, A. 2005. Globalising Citizenship Education? A Critique of 'Global Education' and 'Citizenship Education'. In *British Journal of Educational Studies*. 53(1): 66-89. Blackwell publishing.

Eisenstadt, N. 2006. Community cohesion: tailoring services to communities and families. In *Race Equal Teaching*. 25(1): 17-18. Trentham Books.

Evergeti, V. and Zontini, E. 2006. Introduction: Some critical reflections on social capital, migration and transnational families. In *Ethnic and Racial Studies*. 29(6): 1025-1039. Routledge.

Foster, K. M. 2004. Coming to terms: a discussion of John Ogbu's cultural-ecological theory of minority academic achievement. In *Intercultural Education*. 15(4): 369-384. Carfax Publication..

Gallagher, T., Pritchard, R. 2007. Assimilation and multiculturalism: evolving conceptual frameworks. In *Compare*. 37(5): 567-576.

Gereluk, D. 2005. Communities in a Changing Educational Environment. In *British Journal of Educational Studies*. 53(1): 4-18. Blackwell Publishing.

Gilbert, A. and Koser, K. 2006. Coming to the UK: What do Asylum-Seekers Know About the UK before Arrival? In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 32(7): 1209-1225. Routledge.

Griffiths, D., Sigona, N. and Zetter, R. 2006. Integrative Paradigms, Marginal Reality: Refugee Community Organisations and Dispersal in Britain. In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 32(5): 881-898. Routledge.

Green, A., Preston, J. and Sabates, R. (2003) Education, Equality and Social Cohesion. In *Compare: A journal of comparative education*. 33:4, 453-470, Routledge.

Haynes, J., Tikly, L. and Caballero, C. 2006. The barriers to achievement for White/Black

- Caribbean pupils in English schools. In *British Journal of Sociology of Education*. 27(5): 569-583.
- Hello, E., Scheepers, P. and Slegers, P. 2006. Why the more educated are less inclined to keep ethnic distance: An empirical test of four explanations. In *Ethnic and Racial Studies*. 29(5): 959-985. Routledge.
- Jensen, Th., Chioncel, N. and Dekkers, H. 2006. Social cohesion and integration: learning active citizenship. In *British Journal of Sociology of Education*. 27(2): 186-205.
- Kudhani, A. 2001. From Oldham to Bradford: the violence of the violated. In *Race and Class*. 43(2): 105-110. Institute of Race Relations.
- Kyriakides, Christopher. 2008. Third Way anti-racism: A contextual constructionist approach. In *Ethnic and Racial Studies*. 31(3): 592-610. Routledge.
- Lewis, G. 2005. Welcome to the margins: Diversity, tolerance, and policies of exclusion. In *Ethnic and Racial Studies*. 28(3): 536-558. Routledge.
- Luciak, M. 2004. Minority status and schooling – John U. Ogbu’s theory and the schooling of ethnic minorities in Europe. In *Intercultural Education*. 15(4): 359-368. Carfax Publishing.
- Marjoribanks, K. 2004. Families, schools, individual characteristics, and young adults’ outcomes: Social and cultural group difference. In *International Journal of Educational Research*. 41: 10-23. Elsevier Ltd.
- Mason, D. 2003. Changing ethnic disadvantage: an overview. In *Explaining Ethnic Differences*. ed. Mason, D., 9-19. The Policy Press.
- May, S. 2002. Multiculturalism. In *A companion to Racial and Ethnic Studies*. ed. Goldberg, D.T. and Solomos, J., 124-144. Blackwell Publishers Ltd.
- McGhee, D. 2006. Getting ‘Host’ Communities On Board: Finding the Balance Between ‘Managed Migration’ and ‘Managed Settlement’ in Community Cohesion Strategies. In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 32(1): 111-127. Routledge.
- Mibourne, L. 2002. Unspoken Exclusion: experiences of continued marginalization from education among ‘hard to reach’ groups of adults and children in the UK. In *British Journal of Sociology of Education*. 23(2): 287-305.
- Modood, T. 2003. Ethnic differentials in educational performance. In *Explaining Ethnic*

- Differences*. ed. Mason, D., 53-67. The Policy Press.
- Mirza, H. S. 2006. 'Race', gender and educational desire. In *Race Ethnicity and Education*. 9(2): 137-158. Routledge.
- Morris, L. 2007. New Labour's Community of Rights: Welfare, Immigration and Asylum. In *Journal of Social Policy*. 36(1): 39-57. Cambridge Press.
- Neal, S. 2003. The Scarman Report, the Macpherson Report and the Media: How Newspapers Respond to Race-centred Social Policy Interventions. In *Journal of Social Policy*. 32(1): 55-74. Cambridge Press.
- Olssen, M. 2004. From the Crick Report to the Parekh Report: multiculturalism, cultural difference, and democracy – the re-visioning of citizenship education. In *British Journal of Sociology of Education*. 25(2): 179-192.
- Owen, D. 2003. The demographic characteristics of people from minority ethnic groups in Britain. In *Explaining Ethnic Differences*. ed. Mason, D., 21-52. The Policy Press.
- Panjwani, F. 2005. Agreed Syllabus and Un-Agreed Values: Religious education and Missed Opportunities for Fostering Social Cohesion. In *British Journal of Educational Studies*. 53(3): 375-393. Blackwell Publishing.
- Parekh, B. 2006. *Rethinking Multiculturalism: Cultural Diversity and Political Theory* 2nd ed. Palgrave MacMillan.
- Peach, C. 2006. Muslims in the 2001 Census of England and Wales: Gender and economic disadvantage. In *Ethnic and Racial Studies*. 29(4): 629-655. Routledge.
- Pike, M.A. 2008. Faith in citizenship? On teaching children to believe in liberal democracy. In *British Journal of Religious Education*. 30(2): 113-122.
- Pinson, H. and Arnot, M. 2007 Sociology of education and the wasteland of refugee education research. In *British Journal of Sociology of Education*. 28(3): 399-407.
- Ray, L. and Reed, K. 2005. Community, mobility and racism in a semi-rural area: Comparing minority experience in East Kent. In *Ethnic and Racial Studies*. 28(2): 212-234. Routledge.
- Reakes, A. 2007. The education of asylum seekers: Some UK studies. In *Research in Education*. 77: 92-107. Manchester University Press.
- Reed, C. 2005. Comparing New Migration with Old: Exploring the Issue of Asylum and

- Settlement. In *Making Race Matter: Bodies, Space and Identity*. ed. Alexander, C. and Knowles, C., 76-89. Palgrave.
- Reiss, M., DePalma, R. and Atkinson, E. 2007. *Marginality and Difference in Education and Beyond*. Trentham Books.
- Reynolds, T. 2006. Caribbean families, social capital and young people's diasporic identities. In *Ethnic and Racial Studies*. 29(6): 1087-1103. Routledge.
- Rhamie, J. and Hallam, S. 2002. An Investigation into African-Caribbean Academic Success in the UK. In *Race Ethnicity and Education*. 5(2): 151-170. Carfax Publishing.
- Ross, A. 2007. Multiple identities and Education for Active Citizenship. In *British Journal of Educational Studies*. 55(3): 286-303. Blackwell Publishing.
- Seddon, M.S., Hussain, D. and Malik, N. 2003. *British Muslims: Loyalty and Belonging*. The Islamic Foundation.
- Singh, G. 2004. Multiculturalism in Contemporary Britain: Community Cohesion, Urban Riots and the 'Leicester Model'. In *Governance in Multicultural Societies*. ed. Rex, J and Singh G., 56-69. Ashgate Publishing Ltd.
- Singh Ghuman, P.A. 2002. South Asian Adolescents in British Schools: a review. In *Educational Studies*. 28(1): 47-59. Carfax Publishing.
- Song, M. 2003. *Choosing Ethnic Identity*. Polity Press.
- Short, G. 2002. Faith Schools and Social Cohesion: Opening up the Debate. In *British Journal of Religious Education*. 2(2): 129-141.
- The Commission of the Future of Multi-Ethnic Britain 2000. *The Future of Multi-Ethnic Britain*. Profile Books Ltd.
- Thomas, P. 2007. Moving on from 'Anti-Racism'? Understandings of 'Community Cohesion' held by Youth Workers. In *Journal of Social Policy*. 36(3): 435-455. Cambridge Press.
- Twine, F. W. 2004. A white side of black Britain: The concept of racial Literacy. In *Ethnic and Racial Studies*. 27(6): 878-907. Routledge.
- Uberoi, V. 2007. Social Unity in Britain. In *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 33(1): 141-157. Routledge.
- Vertovec, S. 2007. Super-diversity and its implications. In *Ethnic and Racial Studies*. 30(6):

1024-1054. Routledge.

Vincent, R. and Coles, M. 2003 Creative approaches to community cohesion. In *Race Equality Teaching*. 21(3): 6-10. Trentham Books.

Waters, T. and Leblanc K. 2005. Refugees and Education: Mass Public Schooling without a Nation-State. In *Comparative Education Review*. 49(2): 129-147.

Wright, C. and Weekes, D. 2003. Race and Gender in the Contestation and Resistance of Teacher Authority and School Sanctions: The Case of African Caribbean Pupils in England. In *Comparative Education Review*. 47(1): 3-20.